e ラーニングキャリア教育科目の受講生の特性分析

Analysis of Learner Characteristics on E-learning Course for Undergraduate Career Education

桑原 千幸^{*1*2},喜多敏博^{*1},合田美子^{*1},鈴木克明^{*1} Chiyuki KUWAHARA^{*1*2}, Toshihiro KITA^{*1,} Yoshiko GODA^{*1}, Katsuaki SUZUKI^{*1} ^{*1} 熊本大学大学院教授システム学専攻

*1 Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University **2 京都文教短期大学

*2 Kyoto Bunkyo Junior College Email: ckuwahara@po.kbu.ac.jp

あらまし: 大学間連携プログラムの e ラーニング科目としてキャリア教育科目を開講し、オンラインでのキャリア教育科目の受講生の特性を分析・可視化することを目的として、進路選択自己効力の調査と、コース志望理由の計量テキスト分析を行った。分析結果から、全国平均よりも進路選択自己効力の高い学生が受講していること、受講生の学年によって志望理由や科目への期待が異なることが示唆された。

キーワード: キャリア教育, e ラーニング, 進路選択自己効力, テキストマイニング

1. はじめに

キャリア教育では他者との相互作用の中で自己理解を深めることが重要なため、相互評価学習が有効であると考えられる.筆者らは対面授業型式のキャリア教育科目において、Moodle を用いた相互評価学習の実践前後で進路選択自己効力が有意に向上することを明らかにした(桑原ほか 2014).そこで、eラーニング科目でも同様の効果が得られるか検討するために、大学間連携システム上に相互評価学習を取り入れたキャリア教育科目を開講した.本稿では、同科目をどのような受講生が受講しているのか、受講開始時点の進路選択自己効力調査と受講生の志望理由のテキスト分析によって検討する.

2. 方法

2.1 コースの概要

2014年度前期に、大学コンソーシアム京都単位互換科目として、大学2年次以下を対象とした「キャリア形成論」を開講した、本科目のシラバスの抜粋

を表 1 に示す. 各回の授業は 30~45 分程度の VOD とリソース, 掲示板で構成され, タスクとして掲示板での投稿と返信が義務付けられる. また, 14 回ではフォーラムモジュールでキャリアプランの相互コメント学習を行う. 受講生は出願時に志望理由を書くことを求められている.

2.2 分析方法

進路選択自己効力については、浦上(1995)の尺度(30項目4件法)による調査を、第1回にGoogleフォーム上で行った。尺度の各項目について、「全く自信がない」を1点、「非常に自信がある」を4点として得点化し、30項目の合計点を進路選択自己効力尺度得点として用いた。有効回答数は26件である。

志望理由テキストの分析には、フリーソフトウェアの KH Coder を用いた. 一名の志望理由を一つの文書単位としてデータをまとめた. データのクリーニングとして、「就活」といった略語を置換し、数字はすべて半角とした. 強制抽出語の検討には、専門用語自動抽出システム「TermExtract」を利用した.

表 1 VOD科目「キャリア形成論」のシラバス抜粋

講義概要	主体的なキャリア形成が求められる社会情勢やキャリアの基本的な概念を学び、自己理解、職業理解を深めることによって職業観を育む。また、将来の目標や夢を実現するために何をするべきかというキャリアデザインを行っていく。 VOD 講義視聴の他に、掲示板上での相互コメントや提出課題の相互評価学習といったオンラインの協調活動を通じて、他の大学・短期大学に所属する受講者と意見を交わし、多様な価値観に触れることによって自己理解の深化をめざす。単に講義を聞くだけではなく、自分の考えを文章や口頭で表現し、授業に積極的に取り組む姿勢を求める。
到達目標	1) キャリア形成が求められる社会情勢と、さまざまな職業や多様な働き方について理解することで自らの職業観を確立する。2) 自己理解を深め、口頭または文章で自分の考えを表現することができるようになる。3) 夢や目標の実現のためにこれから何をするべきかを考えて計画し、行動することができるようになる。

3. 結果と考察

3.1 受講生の概要

8 大学 19 学部の 2~5 回生 56 名 (内訳: 2 回生 7 名, 3 回生 20 名, 4 回生以上 29 名) が受講した. 性別の内訳は男子学生 40 名、女子学生 16 名である.

3.2 進路選択自己効力の特徴

受講生の第1回時点の調査における進路選択自己 効力尺度得点の平均値は87.73点(SD=14.05)であった.2007年に実施された「大学生のキャリア意識調査」では、本研究と同一の尺度が使用されている(京都大学/電通育英会2007).同調査では、1年生(N=988)の平均が78.06点、3年生(N=1025)の平均が79.47点であり、全国平均よりも進路選択自己効力の高い学生が本研究のeラーニングキャリア教育科目を受講していると言える.この結果は、進路選択自己効力が高い学生ほど進路選択に関わる活動を活発に行うという先行研究とも一致する.

3.3 志望理由の計量テキスト分析

総抽出語数は 6,028 (うち使用された語数 2,285), 599 の異なる語句が用いられていた. 再頻出語は「自分」(109回)で、その後に「キャリア」「思う」「社会」「考える」「就職」が続いた.

受講生の学年ごとの頻出語句の特徴を調べた対応 分析の結果を図1に示す.四角で囲まれた学年を示 す変数の方向にあり、原点から離れている語ほど特 徴的であると言える.対応分析とテキストの検討か ら、2回生は広く社会とキャリアについて学び考え を広げていきたいと考えていること,3 回生は翌年の就職活動に向けて夢や将来を明確にし,選択をする必要性を感じており,他大学の学生の意見に関心があること,就職活動の最中にある4回生は自分自身や社会人生活,今後のキャリア形成への関心が高いことが示唆された.

今回の分析では、受講開始という入り口の段階で受講生がどのような特性を備えているかに着目した。今後は、受講の前後で受講生の進路選択自己効力がどのように変化しているのか、量的調査の前後比較と最終段階での振り返りレポートのテキスト分析によって検討していきたい。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金若手研究(B)(課題番号: 26750093)の補助を受けたものである.

参考文献

- (1) 桑原千幸, 喜多敏博, 合田美子, 根本淳子, 鈴木克明: "初年次キャリア教育科目における相互評価学習の 実践と進路選択自己効力の向上", 日本教育工学会論 文誌, 第38巻, 第2号, pp.79-89 (2014)
- (2) 浦上昌則: "学生の進路選択に対する自己効力に関する研究",名古屋大学教育学部紀要教育心理学科,第42巻,pp.115-126 (1995)
- (3) 京都大学/電通育英会共同: "大学生のキャリア意識調査 2007"

http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/transmission/investigatio n/result/ $(2015/6/6 \, \text{アクセス})$

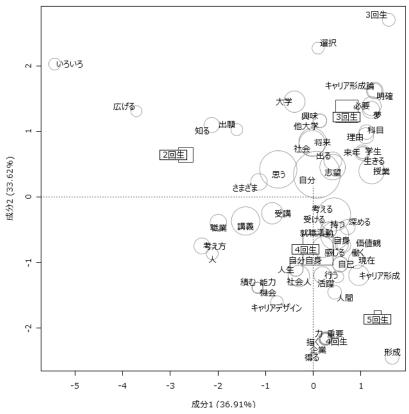


図 1 対応分析の結果